

土井ヶ浜遺跡出土人骨の頭位方向と顔面方向について

綾 香奈江

1. はじめに

土井ヶ浜遺跡について検討を加えた研究はいくつかあるが、いずれも人骨の形質や出自といった被葬者の研究、もしくは当時の社会構造に焦点をあてたものが多い。それ故に埋葬施設の選択・埋葬の姿勢・頭や顔の方向といった墓地への葬られ方についての具体的な研究というのは実に少ない（石倉 1984, 山田 1997、1998, 古庄 2005, 田中 2008, 舟橋 2010）。

土井ヶ浜遺跡の埋葬は決して無秩序に行われていないことは明らかである。埋葬の特徴の中でも特に、土井ヶ浜遺跡に葬られた人々が北西にある海の方角を見るかのように頭を南東に置いていると云われていることは実に興味深い事柄である（金関ほか 1961, 乗安 2014）。しかしながら頭位の方向範囲に対して顔面の方向範囲が対称となるのか、さらに両者がどの程度の方向範囲にあるのかについて明確に示したものは皆無である。

よって本稿は、頭位方向と顔面方向の傾向を明らかにすることを目的とし、また性別や年齢などの観点から検討を加えることにする。

2. 研究方法

(1) 対象資料

資料は土井ヶ浜遺跡第1～19次調査出土人骨を用いる。方向を求めるにあたり、次の諸条件を満たすものに限る。

①頭蓋骨の残存が良好である。

顔面方向は主に眼窩を基準にして求めている。よって顔面頭蓋の残存を重視し、顔面頭蓋が著しく壊れている場合は頭位方向のみを求め、顔面方向には用いないことにする。また同様に、頭蓋骨が良好であっても、俯臥姿勢のように顔面頭蓋が下向きで眼窩または縫合線が確認できないものについては除外の対象とする（図1-f）。

②攪乱を受けていない。

人骨がほぼ解剖学的位置を保つ状態であれば攪乱を受けていても資料として用いるが、集骨は骨の移動がどの程度起こったのか判断が容易ではない。よって集骨に限り、攪乱を受けている場合は除外の対象とする。

③頭蓋骨の向きが分かる。

本稿では報告書の図面から方向を算出している。しかし、頭蓋骨が重なった状態で出土している場合、下にある人骨は図面に縫合線が描かれていないことが多く、また形状も曖昧である。このことから、図面もしくは写真を用いても頭蓋骨の大まかな向きが判別できないものについては除外の対象とする。

以上の条件に基づき、人骨の埋葬状態が判別できたものは144例（表1）、そのうち頭位方向は90例、顔面方向は130例を対象に検討を行なった。

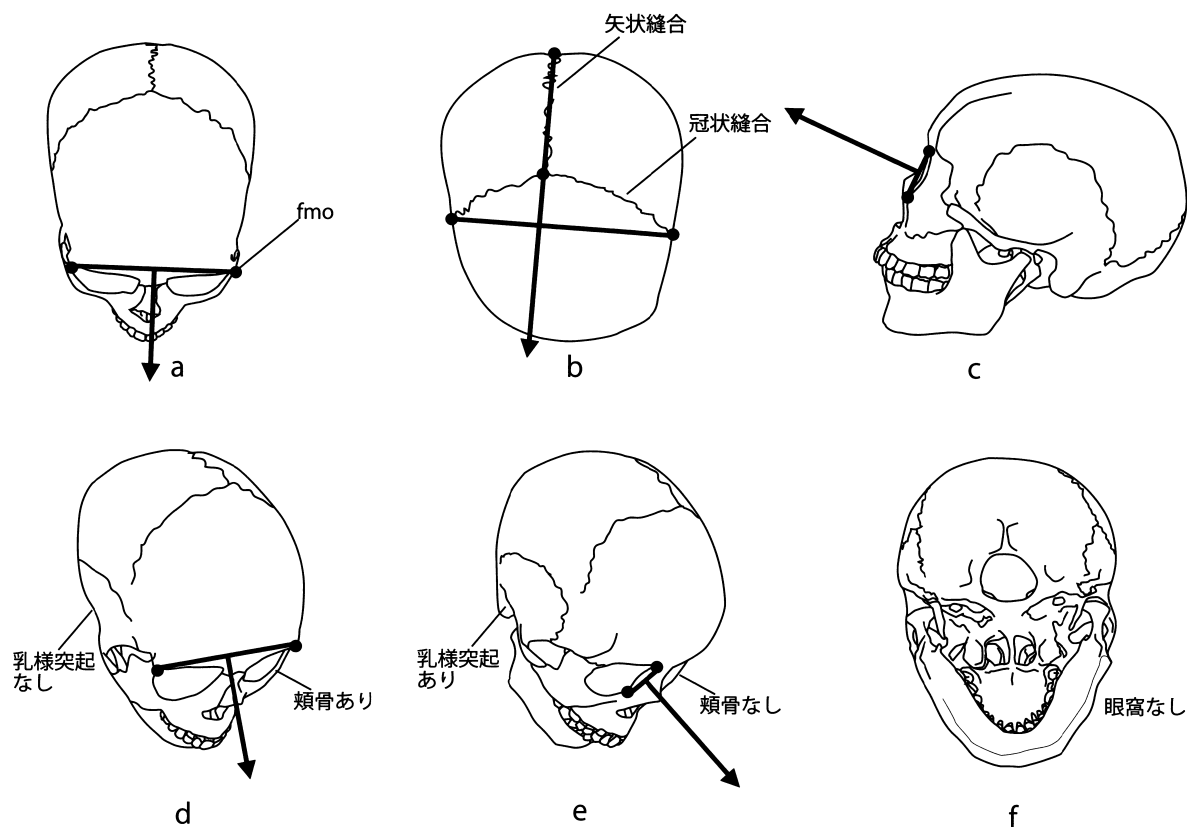


図1 顔面方向の求め方

(2) 方向の求め方

方向の算出方法は原則報告書の図面を用いる（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 2014）。頭位方向は頭頂部付近と椎骨または骨盤の中心にあたる部分とを直線で結び求める。顔面方向は正面の場合、眼窩が見える場合と見えない場合の2通りが考えられる。見える場合は左右の前頭頬骨縫合と眼窩外側縁との交点 [fmo] 付近を直線で結び、それに直角に伸びる線を方向とする（図1-a）。見えない場合は、冠状縫合と矢状縫合が直角に交わり顔面頭蓋方向に伸びる線を顔面方向とする（図1-b）。側面は、眼窩内側縁の上下の角を結び、それに直角に伸びる線を方向とする（図1-c）。正位ではなく左右に傾く場合は、それを正位とするか側面とするか判断基準が曖昧である。よって左右頬骨が見え、乳様突起が見えない状態であれば正位とし、片側の頬骨が見えずに乳様突起が見えている状態であれば側面と定め各方法で顔面方向を求めることにした（図1-d、e）。

方向は北を0度に設定し、角度データとして円周上にプロットする。角度データを用いる際に注意しなければならないことは、角度が360度で一周するということである。例えば、0度・20度・340度・350度とするデータがあるとするならば、このデータの平均は北方向になるはずだが、通常の算術平均では177度となって正反対の南を向いてしまい、誤った平均を示してしまう。そのため本稿では角度を $\sin \theta / \cos \theta$ の座標として各座標の平均値を求め、この平均値を座標としてもつ角度を平均方向として定めた。データの散らばりは、平均合成ベクトル長 $\bar{R}$ ($\bar{R} = \sqrt{S^2 + C^2/n}$) から求める。 $\bar{R}$ は $0 \leq \bar{R} \leq 1$ であり、全ての角度が同じである場合のみ1となる。したがって、 $\bar{R}$ が1に近ければデータは集中しているといえ、0に近ければ散らばっているといえる（新井 2011）。

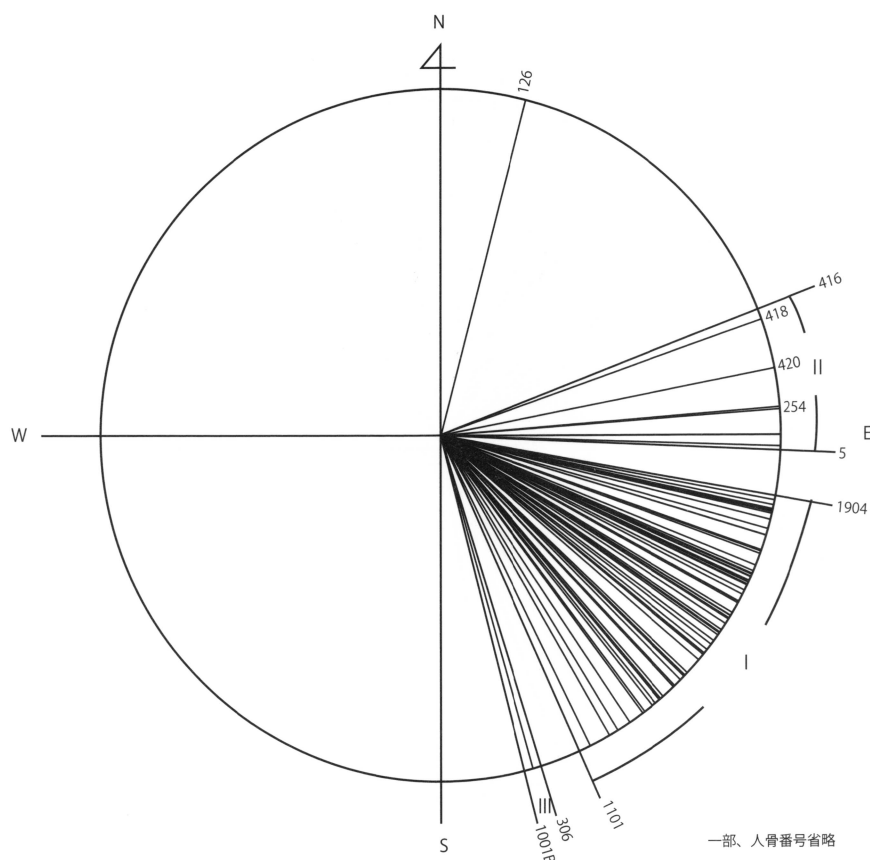


図2 頭位方向の方向範囲

3. 結果

(1) 頭位方向

図2は90例の頭位方向の分布を示したものである。90例は北を向いた126号人骨を除いて、南東を中心に一定の範囲におさまっている。この大幅に方向が異なっている126号人骨は、埋葬姿勢が上・下肢ともに強屈しており、上半身は側臥、下半身は俯臥のような姿勢をしている。この姿勢はそのほかの土井ヶ浜遺跡の弥生時代の埋葬人骨にはみられない特徴である。これは頭位方向の観点からみても、126号人骨のように北方向に頭位を向ける人骨というのは、803号人骨/804号人骨/915号人骨/1402号人骨/1403号人骨/1603号人骨の6例で、いずれも中・近世であることから、126号人骨は弥生時代の埋葬ではない可能性は高いだろう。よって、今後は126号人骨を除く89例で検討を加えていくことにする。

89例はおよそN68EからS15Eの範囲(97度)に頭位を向けている。平均方向は122度、 $\bar{R}$ は0.944でほぼ1に等しく、データが平均方向の122度に集中していることがわかる。しかし416号人骨と1001B号人骨の方向のずれからして、一概に方向が似ていると判断することは無理があるだろう。そこで円周上に隣り合う人骨同士の角度差の集計を行なうことにした。結果、平均値は1.1度、標準偏差は1.6度であり、これを円周上のデータに当てはめて考えてみると、特に418号人骨/420号人骨/254号人骨、5号人骨/1904号人骨、1101号人骨/306号人骨の間の角度が、それぞれ8.4度、6.5度、7.7度、6.9度と大きいことが確認できた。さらに1904号人骨から1101号人骨までの56度の範囲は、角度差は1度未満が大半であるのに対して、5号人骨から416号人骨の角度差は大きい。つまり範囲

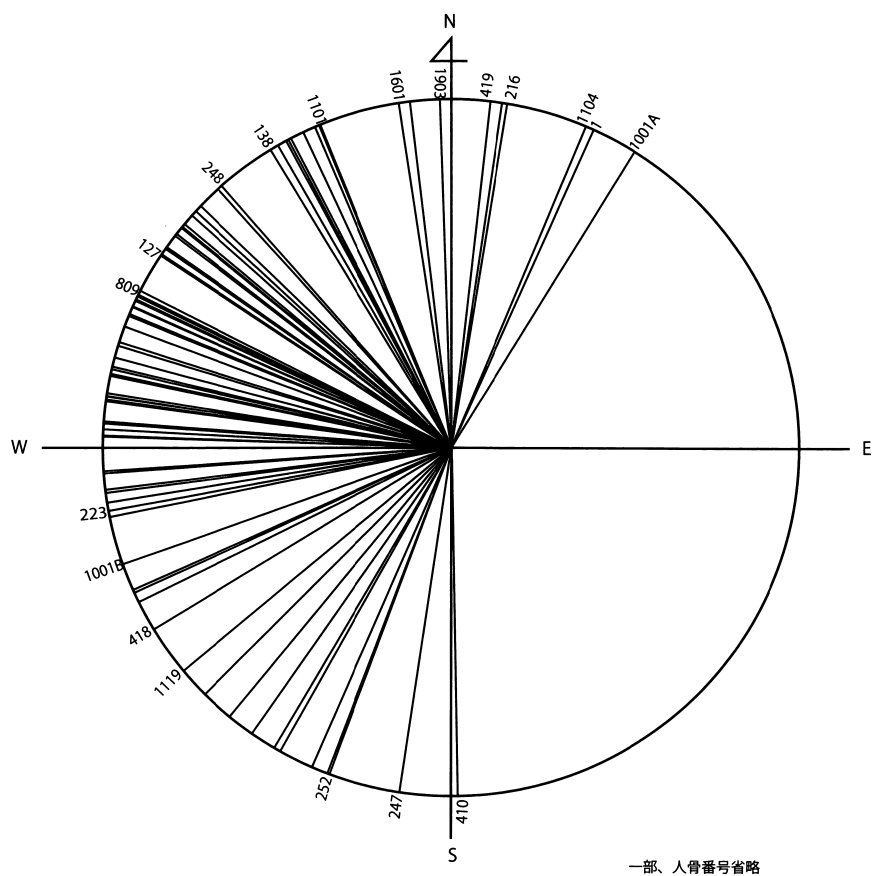


図3 顔面方向の方向範囲

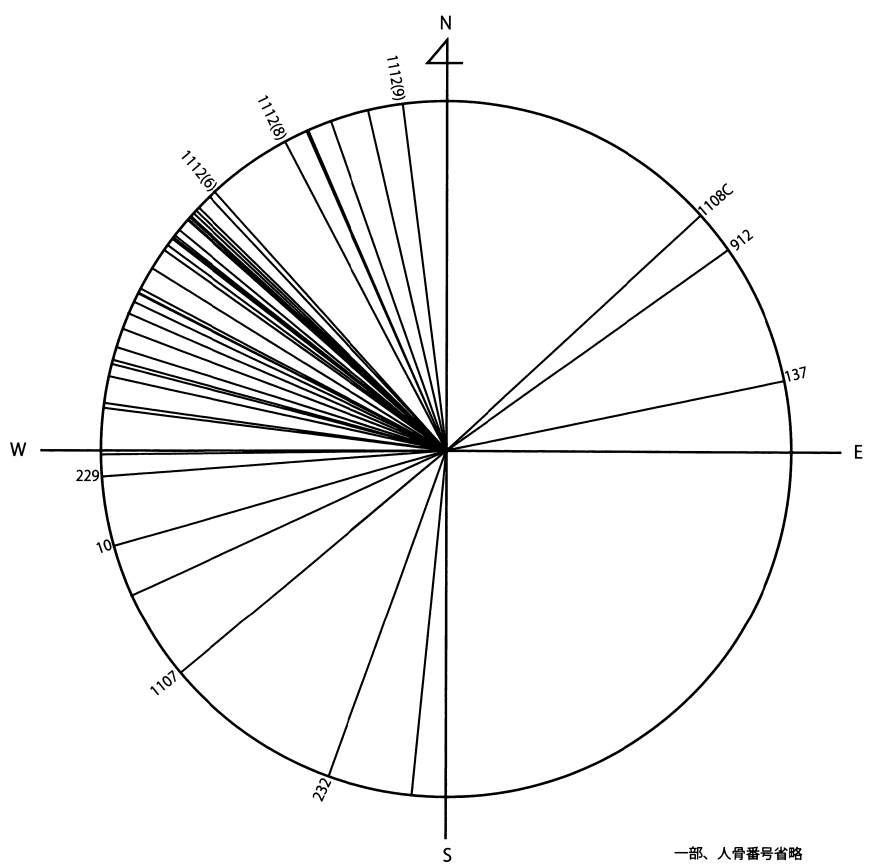


図4 集骨の方向範囲

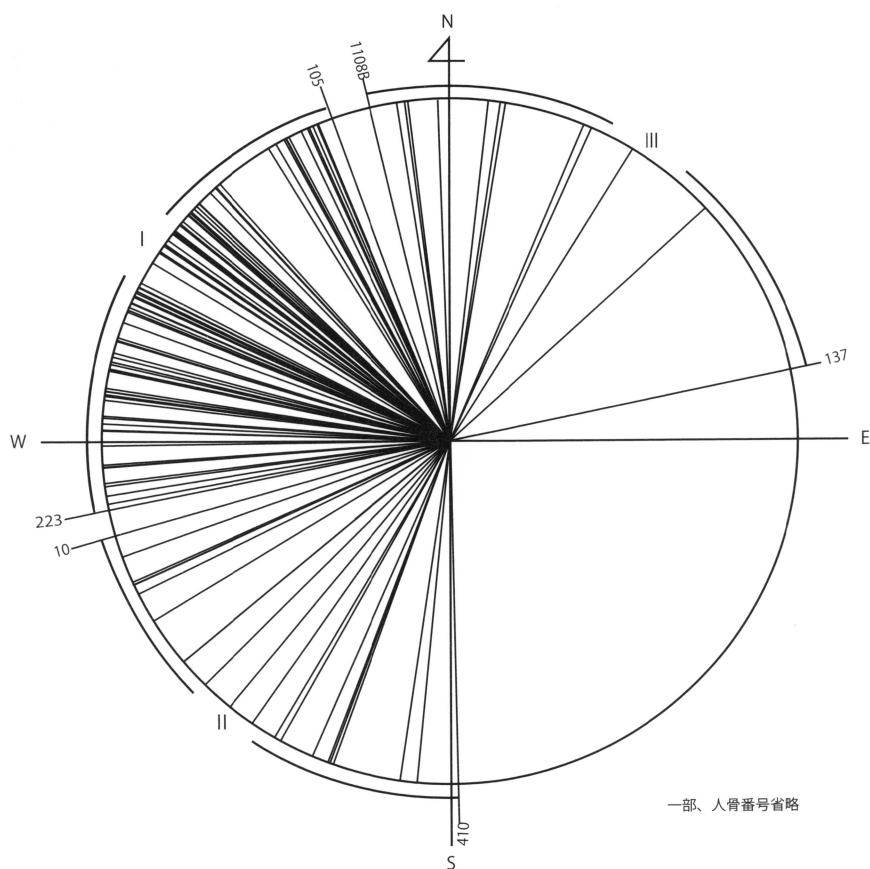


図5 顔面方向全体の方向範囲

の振れ幅は広いものの S80E ~ S24E が土井ヶ浜弥生人の主たる頭位方向であると思われ、1904 号人骨と 1101 号人骨を境にして、その範囲から外れるように東と南に散らばっているようである。

(2) 顔面方向

図3～図5は顔面方向の分布を示したものである。集骨（頭部再葬）を除く 85 例は S1E から N32E の範囲（213 度）に顔を向けている（図3）。平均方向は 290 度、 $\bar{R}$ は 0.726 で比較的 1 に近いが、頭位方向に比べると分散する傾向にある。人骨同士の角度差は、平均値 2.5 度、標準偏差は 3.2 度である。これを円周上のデータに当てはめてみると、特に 216 号人骨/1104 号人骨、410 号人骨/247 号人骨/252 号人骨、248 号人骨/138 号人骨、1101 号人骨/1601 号人骨が、それぞれ 13.4 度、11.9 度、10 度、13.4 度と差が大きいことがわかる。さらに細かくみれば 1 号人骨/1001A 号人骨、1119 号人骨/419 号人骨、1001B 号人骨/223 号人骨、809 号人骨/127 号人骨、1903 号人骨/419 号人骨も 7.6 度、8.7 度、8.1 度、6.7 度、8.3 度と比較的角度的差があることが確認できた。顔面方向は 223 号人骨と 1101 号人骨を境に S78W から N22W の範囲に集中をみせるが、その範囲もまた細かく分散する傾向にある。

次に集骨（頭部のみを含む）の 45 例は、S6W ~ N78E の範囲（253 度）に顔を向けている（図4）。平均方向は 303 度、 $\bar{R}$ は 0.759 で上記の 85 例と散らばりはそれほど変わらない。人骨同士の角度差は、平均値 5.7 度、標準偏差 9.9 度である。これを円周上のデータに当てはめて考えると、912 号人骨/137 号人骨、232 号人骨/1107 号人骨、1112(9) 号人骨/1108C 号人骨の間が 23.8 度、30.1 度、54.5 度と角度差が大きい。また 1107 号人骨～1112(9) 号人骨までの分布から、さらに細かくみると 10 号

表2 頭位方向の性別・年齢区分内訳一覧

性別・年齢 頭位方向	男				女			未成人	計
	壮年	熟年	老年	不明	壮年	熟年	老年		
クラスターⅠ	8	20	4	0	15	17	4	10	78
	9.0%	22.5%	4.5%	0.0%	16.9%	19.1%	4.5%	11.2%	87.6%
クラスターⅡ	0	0	3	1	1	2	1	0	8
	0.0%	0.0%	3.4%	1.1%	1.1%	2.2%	1.1%	0.0%	9.0%
クラスターⅢ	0	0	0	0	0	0	1	2	3
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.1%	2.2%	3.4%
計	8	20	7	1	16	19	6	12	89
	9.0%	22.5%	7.9%	1.1%	18.0%	21.3%	6.7%	13.5%	100.0%

表3 頭位方向の埋葬遺構内訳一覧

遺構 頭位方向	土壙墓	配石墓	箱式石棺墓	石囲墓	計
クラスターⅠ	47	23	5	3	78
クラスターⅡ	3	5	0	0	8
クラスターⅢ	2	1	0	0	3
計	52	29	5	3	89

人骨/229号人骨、1112(6)号人骨/1112(8)号人骨の角度差も大きいと考えられる。つまり集骨はS86W～N42Wの範囲に方向が集中しており、また例数も少なく分散しているが、N8W～N28Wの範囲にも1つのまとまりの存在が確認できる。

最後に130例全体の平均方向は295度、 $\bar{R}$ は0.733、人骨同士の角度差は平均値2.0度で標準偏差3.4度である(図5)。円周上のデータに当てはめると、216号人骨/1104号人骨、1号人骨/1001A号人骨、912号人骨/137号人骨、247号人骨/232号人骨、1107号人骨/418号人骨、248号人骨/138号人骨、1903号人骨/419号人骨の角度差が大きいようである。分布からみてS79W～N20Wの範囲(83度)に方向が集中する傾向にはあるが、248号人骨/138号人骨にみられるように、やはり集中方向が分かれる傾向にある。また223号人骨と105号人骨を境にして集中方向はなくなり、東と南に幅広く分散をしている。

4. 考察

(1) 頭位方向¹⁾

乗安和二三氏がいうように土井ヶ浜遺跡の頭位方向は一元的な傾向が強いと考えられる(乗安2014)。しかし一元的な傾向にあるとはいえ、一部そこから外れる人骨がいることも事実であり、故にそれらに何か特徴がみられないか具体的な検討は必要であろう。そこで被葬者の性別・年齢・抜歯型式と埋葬遺構・埋葬位置の観点から、主たる方向とそこから外れる方向とを区分し検討を加えることにする。人骨の性別・年齢・抜歯型式の所見は報告書の記載を使用している(松下ほか2014)。

まず土井ヶ浜遺跡では頭位方向がS80E～S24Eの範囲に頭位を向けており、そこから外れるように東と南に頭位を向ける人骨が存在することが結果から分かっている。便宜的に南東方向をクラスターⅠ、東方向をクラスターⅡ、南方向をクラスターⅢと定めることにする。

頭位方向が確認できた人骨のうち、男性は36例、女性は41例、未成人は12例である(表2)。クラスターⅠは男性が32例、女性が36例で性別に偏りはみられない。また年齢についても男女ともに

熟年が多く含まれ、続いて壮年・老年となるが、含まれる個体数に大差はみられない。次にクラスターⅡは男性が3例、女性が4例でクラスターⅠと同様に性別に偏りはない。年齢は女性には壮年・熟年・老年の含まれる個体数に差はみられないが、男性は壮年・熟年がクラスターⅠに全て含まれ、クラスターⅡには老年だけが含まれている。しかし、この老年男性3例のみに表われる特徴というものは現在のところ確認できず、また老年という括りだけで判断するならばクラスターⅡに老年が全くいないわけではない。このことから年齢のみによって左右されていたとは考えられず、すなわち主たる方向に向けられるか否かは性別・年齢によって決定付けられていたとはいえないだろう。

埋葬遺構は、土壙墓は52例、配石墓は29例、箱式石棺墓は5例、石囲墓は2例である（表3）。各クラスター別にみると、土壙墓と配石墓はどのクラスターにも含まれるが、箱式石棺墓はクラスターⅠにのみ含まれるようである。箱式石棺墓が土壙墓などよりも付加価値の高い埋葬遺構であり、集団の経済力が反映されているとするならば（乗安2014）、クラスターⅠとⅡ・Ⅲの人骨の間には経済的な差があったのだろうか。なぜならば、クラスターⅡ・Ⅲでは抜歯や赤色顔料が施されることはあっても、副葬品の類は1つも持ち合わせていないからである。しかしながら埋葬遺構・副葬品の有無が、主方向に向けられるかどうかの判断材料として関係していたのか、今の段階では断定はできない。今後、土井ヶ浜遺跡以外の遺跡を用いて検討を行なうことが必要になるだろう。

土井ヶ浜遺跡の抜歯型式はⅠ型（切歯のみの抜歯）・Ⅱ型（犬歯のみの抜歯）・Ⅲ型（切歯と犬歯両方の抜歯）・Ⅳ型（無抜歯）・Ⅴ型（小臼歯のみの抜歯）・Ⅵ型（小臼歯と犬歯の抜歯）の6型式がある。頭位方向のわかる人骨のうち抜歯が施されていたものは上顎が39例、下顎が19例、上・下顎無抜歯が17例である。抜歯型式はクラスターⅡ・Ⅲに含まれる例数が少なく検討を加えることはできないが、クラスターⅡに施された抜歯型式3例が特定の型式に偏っていないことから、抜歯によって決定付けられていた可能性は低いと考えられる。

最後に埋葬位置であるが、クラスターⅡは5号人骨と254号人骨を除いて、東側墓域の北に分布している（図6）。クラスターⅢは例数が少ないため分布は判断できないが、3例とも東よりに位置している。また同時埋葬と考えられる合葬例については、308号人骨－309号人骨、253号人骨－254号人骨のように頭位方向が異なっており、全体的にみても埋葬位置が隣接していても頭位方向は若干異なるようである。

以上、主方向に向けられる人骨と向けられない人骨は、性別・年齢・抜歯によって決定付けられるものではないことが確認できた。要因として埋葬遺構、埋葬位置の違いなどが考えられるが、現段階では断定はできない。

（2）顔面方向

土井ヶ浜遺跡の顔面方向はS79WからN20Wの範囲に顔を向け、223号人骨と105号人骨を境に東と南に分散するということが結果からわかっている。ここでも便宜的に北西をクラスターⅠ、南西をクラスターⅡ、北東をクラスターⅢと定めることにする。

顔面方向が確認できた人骨のうち、男性は49例、女性は57例、未成人は18例である（表4）。クラスターに性差による偏りはみられない。年齢は、熟年はどのクラスターにも多く含まれるがクラスターⅡは壮年男性、クラスターⅢは老年女性の数が少ない傾向にある。しかし、熟年を除くそれほか

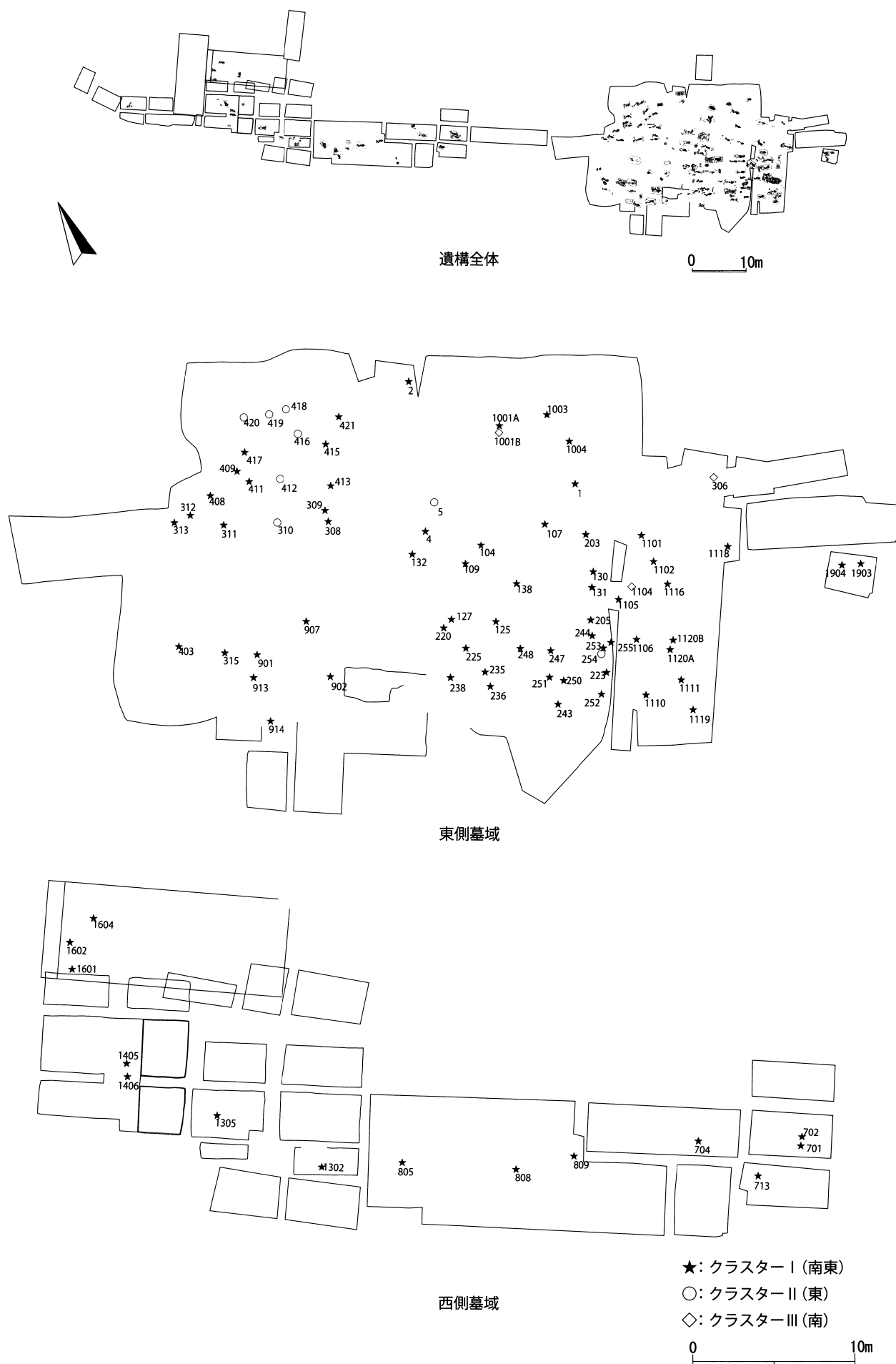


図6 頭位方向と埋葬位置

表4 顔面方向の年齢・性別区分内訳一覧

性別・年齢 顔面方向	男			女			不明	未成人	計
	壮年	熟年	老年	壮年	熟年	老年			
クラスターⅠ	5	18	11	18	19	7	5	12	95
	3.8%	13.8%	8.5%	13.8%	14.6%	5.4%	3.8%	9.2%	73.1%
クラスターⅡ	0	5	3	1	5	2	1	4	21
	0.0%	3.8%	2.3%	0.8%	3.8%	1.5%	0.8%	3.1%	16.2%
クラスターⅢ	1	5	1	2	3	0	0	2	14
	0.8%	3.8%	0.8%	1.5%	2.3%	0.0%	0.0%	1.5%	10.8%
計	6	28	15	21	27	9	6	18	130
	4.6%	21.5%	11.5%	16.2%	20.8%	6.9%	4.6%	13.8%	100.0%

表5 顔面方向の埋葬遺構内訳一覧

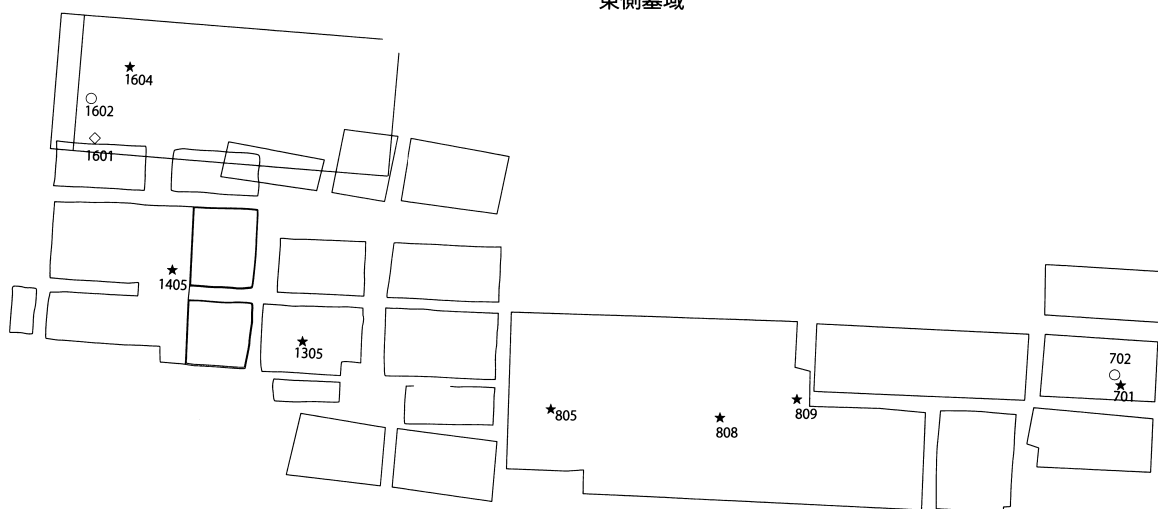
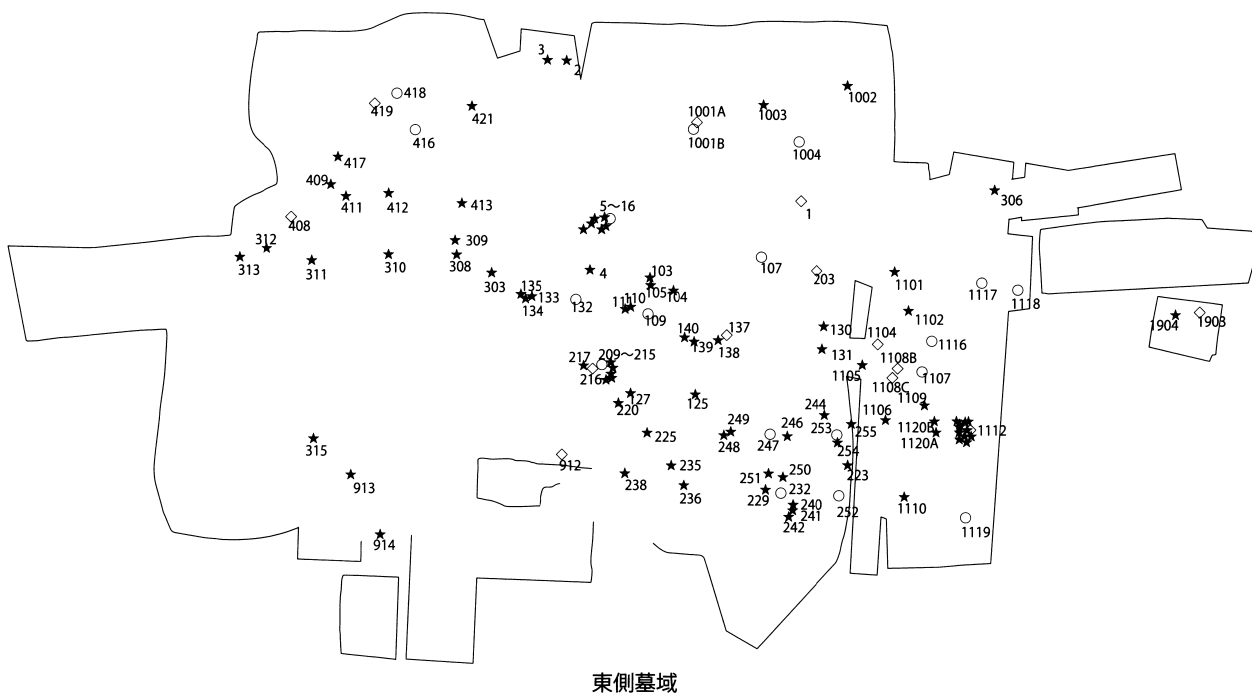
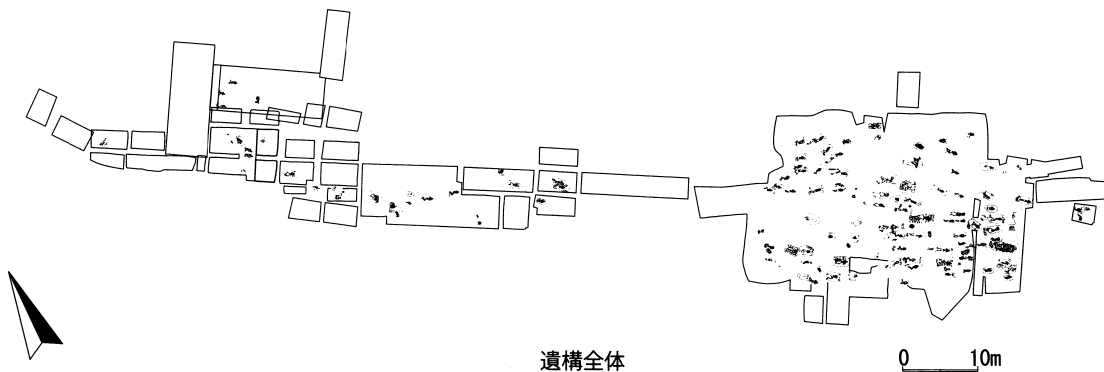
遺構 顔面方向	土壌墓	配石墓	箱式石棺墓	石囲墓	集骨	頭部再葬	計
クラスターⅠ	32	18	8	2	15	20	95
クラスターⅡ	10	6	0	0	3	2	21
クラスターⅢ	6	3	1	0	1	3	14
計	48	27	9	2	19	25	130

の年齢も例数が多いわけではないため、これ以上の言及はできない。

埋葬遺構は、土壌墓 48 例、配石墓 27 例、箱式石棺墓 9 例、石囲墓 2 例、集骨 19 例、頭部再葬 25 例である（表 5）。土壌墓・配石墓はどのクラスターにも含まれるが、箱式石棺墓 9 例の内 8 例はクラスターⅠに含まれており、残りの 1 例は箱式石棺墓に集骨された 137 号人骨である。石囲墓は例数が少ないため検討ができないが、人骨の大半が含まれるクラスターⅠには、いずれかの埋葬遺構に偏るといった傾向はないようである。

抜歯の施行状況の有無が確認できた人骨は上顎が 57 例、下顎が 26 例、上・下顎無抜歯が 30 例である。クラスターⅠの上顎の抜歯型式は、Ⅰ型が 9 例、そのうち 7 例が左右側切歯を抜歯している。C 型は 19 例、IC 型は 12 例存在し、犬歯の抜歯は左右どちらかに偏って施されるということはない。下顎の抜歯型式は、Ⅰ型が 11 例で抜歯本数は 1～4 本と異なっている。C 型の 3 例、IC 型の 4 例、P/PC 型の 2 例はいずれも女性で、P/PC 型はクラスターⅠのみにみられる抜歯型式である。クラスターⅡの上顎の抜歯型式は、Ⅰ型に抜歯を施した 5 例は、いずれも左右側切歯を抜歯した女性である。次に C 型は 3 例、IC 型は 3 例で IC 型の場合男性 2 例は右側切歯と右犬歯を、女性 1 例は左右側切歯と左右犬歯を抜歯している。下顎は 3 例が抜歯を受けているが、いずれも抜歯型式は異なっている。クラスターⅢの上顎の抜歯型式は、Ⅰ型が男女 1 例ずつ、C 型が女性 1 例、IC 型は男性 2 例、女性 1 例で犬歯の左右差はみられない。下顎の抜歯型式は、Ⅰ型が男性 1 例と女性 2 例である。土井ヶ浜遺跡ではクラスターⅠの P/PC 型を除き、クラスター間で特定の抜歯型式のみが現れるということはないようである。このことから抜歯によって方向が決定付けられていないと考えられる。

図 7 は埋葬位置ごとにクラスターの分布を示したものである。墓域の西群では 7 例がクラスターⅠに属している。注目すべきは 701 号人骨と 702 号人骨であるが、両者は互いの視線が交差するような形で向き合った姿勢であると考えられる。次に墓域の東群であるが、クラスターⅠは東群の中央に帯状に分布している。それに対してクラスターⅠから外れるように分散していたクラスターⅡ・Ⅲは、クラスターⅠが分布する位置よりもやや東よりに分布しているようである。しかし、すべての人骨に



- ★: クラスターⅠ (北西)
- : クラスターⅡ (南西)
- ◇: クラスターⅢ (北東)

0 10m

図7 顔面方向と埋葬位置

表6 顔の向きの性別・年齢区分内訳一覧

性別・年齢 顔の向き	男			女			不明	未成人	計
	壮年	熟年	老年	壮年	熟年	老年			
正面	0	3	4	6	8	0	0	0	21
	0.0%	3.9%	5.3%	7.9%	10.5%	0.0%	0.0%	0.0%	27.6%
左向き	3	10	2	3	6	3	1	5	33
	3.9%	13.2%	2.6%	3.9%	7.9%	3.9%	1.3%	6.6%	43.4%
右向き	2	3	1	4	5	1	0	6	22
	2.6%	3.9%	1.3%	5.3%	6.6%	1.3%	0.0%	7.9%	28.9%
計	5	16	7	13	19	4	1	11	76
	6.6%	21.1%	9.2%	17.1%	25.0%	5.3%	1.3%	14.5%	100.0%

表7 顔の向きの埋葬遺構内訳一覧

遺構 顔の向き	土壙墓	配石墓	石棺墓	石囲墓	計
正面	10	7	3	1	21
右向き	14	8	0	0	22
左向き	19	11	2	1	33
計	43	26	5	2	76

その分布が当てはまるわけではない。

(3) 顔の主方向が分かれる要因²⁾

土井ヶ浜遺跡では、頭位方向のまとまりに比べて顔面方向はいくつかに分かれてまとまることを指摘した。この分かれる要因として考えられることは、埋葬人骨の顔の向きの違いが挙げられる。土井ヶ浜遺跡の人骨はまるで北西にある海を見るかのように、頭が高くなっているといわれている。しかし実際は、頭位方向に対して反対を向く場合であっても、体の軸に対して一直線に正面を向く人骨もあれば、右や左に背けるように北西を向く人骨もいることが見てとれる。それらは頭蓋骨が動いていないような状態で出土しているわけであるから、やはり意図して行われている行為であると考えられる。そこで頭位方向と顔面方向が分かる資料をもとに、軸に対する顔の向きについて集成をおこなった。

結果、顔の向きが確認できた人骨は76例で、それぞれ正面は21例、右向きは22例、左向きは33例である。顔面方向で得られたS79W～N20Wの範囲には53例の人骨が存在するが、正面は20例、左向きは19例、右向きは14例である。各向きの方向は正面がS81WからN22W、左向きがS78WからN67W、右向きがN82WからN22Wとなり、主たる方向が3つに分かれていた要因は顔の向きによる影響が強いことがわかる。では、これらの顔の向きは何によって決定されているのだろうか。これまで同様、性別・年齢・埋葬遺構・抜歯・埋葬位置の観点から検討を加えてみることにする。

76例のうち男性は28例、女性は37例、未成人は11例である（表6）。各向きには男女の極短な偏りは見られない。年齢では、正面は壮年男性と老年女性、未成人が1例も含まれていない。つまり特定の性別/年齢をもつ成人と未成人は正面を向かないように葬られていた可能性がある。また埋葬遺構は、土壙墓43例、配石墓26例、箱式石棺墓5例、石囲墓2例が確認でき、土壙墓・配石墓はやはりどの向きにも含まれる遺構である（表7）。そして箱式石棺墓・石囲墓は正面と左向きにのみ含まれている。

抜歯の施行状況の有無が確認できた人骨は、上顎が32例、下顎が17例、上・下顎無抜歯が17例

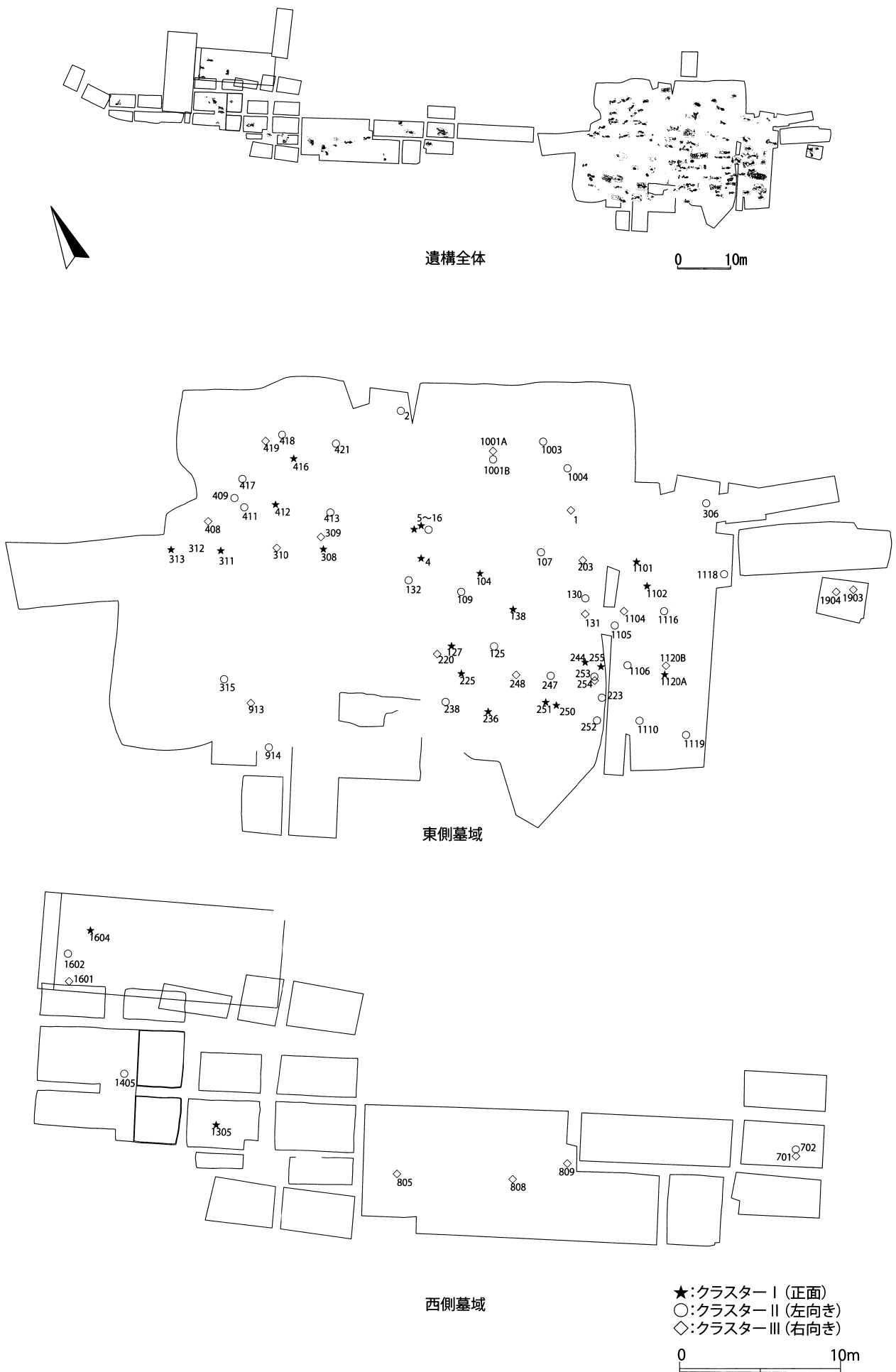


図8 顔の向きと埋葬位置

である。正面の上顎抜歯型式は、I 型が 1 例、C 型が 2 例、IC 型が 5 例である。犬歯の抜歯に左右差はみられない。下顎の抜歯型式は、I 型が 4 例、C 型・IC 型が 1 例ずつ存在する。左向き上顎の抜歯型式は、I 型は 7 例でいずれも左右側切歯に抜歯を施している。C 型は 4 例、IC 型は 4 例で、犬歯の左右差はみられない。下顎は I 型が 3 例、C 型が 1 例、IC 型が 2 例、PC 型が 1 例である。右向きの上顎の抜歯型式は、I 型は 6 例で同じく左右側切歯のみの抜歯である。C 型は 2 例、IC 型は 1 例である。下顎の抜歯型式は、I 型は 2 例、P 型は 1 例である。各向きの傾向は上顎であれば、正面は IC 型が多く、左向き・右向きでは I 型が多く存在するようである。下顎は、正面は I 型に抜歯を施すことが多く、左向きは C 型が少なく、I 型・IC 型にやや偏るようである。また右向きには C 型と IC 型が 1 例も含まれてないということが判明した。

埋葬位置は西群の 10 例は 5 例が右向き、3 例が左向き、2 例が正面である。西群の北西方向を向く人骨は、南東に頭位を向け、顔を右に背けて北西を向く傾向にあったと考えられる。東群の 66 例は 21 例が正面、29 例が左向き、16 例が右向きである。分布は若干のまとまりは確認できるものの、全体的に散らばる傾向にある。隣接する人骨であっても顔の向きが異なる場合があるため北西方向を向かせるという規制の中に、被葬者の顔を正面に置くか、それとも左右に背けて置くかという選択があったことは確かである。

5. おわりに

以上、土井ヶ浜遺跡の頭位と顔面方向の集成を行ない検討を加えた。基本的に頭位と顔の主方向には現在確認できる事柄（性別・年齢など）による偏りというものはないようである。しかしながら主方向とそれとは異なる方向を向く人骨とでは、埋葬遺構および埋葬位置による葬送の違いがあった可能性がある。また顔面方向はただ単純に頭位に対して反対の方向を向くというよりは、正面・左・右といった選択によって決定され、それが顔の主方向が分かれる要因に影響していることが確認できた。今後は同じ響灘沿岸に位置する中ノ浜遺跡をはじめ、弥生時代の頭位方向と顔面方向のあり方について集成を行う必要がある。また箱式石棺墓や石囲墓のような石材を用いた墓の位置付けや何を目印に方向を定めていたかについて検討をし、土井ヶ浜遺跡の葬制を明らかにしていきたいと考えている。

（謝辞）

顔面方向の基準を決めるにあたり、当館学芸員の大藪由美子氏と高椋浩史氏に御教授いただきました。ここに記して感謝の意を表します。

註)

- 1) 頭位方向と抜歯との関連性は林兼作氏と山田康弘氏の研究がある。林 1997、山田 2003 を参照。
- 2) 顔の向きと頭位方向との関連性について林兼作氏の研究がある。林 1997 を参照。

参考・引用文献

新井宏嘉 2011 「地質学における方向データ解析法：円周データの統計学」『地質学雑誌』第 117 巻第 10 号

pp. 547-564

石倉明 1984 「土井ヶ浜遺跡」『日本の遺跡発掘物語 4 弥生時代Ⅱ（西日本）』 pp. 162-186 社会思想社

金関丈夫・坪井清足・金関恕 1961 「山口県土井ヶ浜遺跡」『日本農耕文化の生成』 pp. 223-253 東京堂

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 2014 『土井ヶ浜遺跡第1次～第12次発掘調査報告書 第4分冊図版編』

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

田中良之 2008 「弥生時代の親族関係」『骨が語る古代の家族・親族と社会』 pp. 63-83 吉川弘文館

乗安和二三 2014 「Ⅳ．埋葬と葬送習俗」『土井ヶ浜遺跡第1次～第12次発掘調査報告書 第1分冊本文編』

pp. 209-251

林謙作 1977 「縄文期の葬制 第二部 遺体の配列、とくに頭位方向」『考古学雑誌』第63巻第3号 pp. 1-36

舟橋京子 2010 『抜歯風習と社会集団』 すいれん舎

古庄浩明 2005 「土井ヶ浜遺跡とその社会」『季刊考古学』第92号 pp. 40-43

松下孝幸ほか 2014 『土井ヶ浜遺跡第1次～第12次発掘調査報告書 第2分冊人骨編』 土井ヶ浜遺跡・人類学

ミュージアム

山田康弘編 1997 『土井ヶ浜遺跡第15次発掘調査報告書』 豊北町教育委員会

山田康弘編 1998 『土井ヶ浜遺跡第16次発掘調査報告書』 豊北町教育委員会

山田康弘 2003 「埋葬頭位は社会組織を表すのかー縄文時代の人骨出土例による再検討ー」『立命館大学考古学論集』 pp. 341-366

表1 対象人骨一覧

番号	性別	年齢	埋葬遺構	抜歯型式	頭位方向	顔面方向	向き	備考
1	女	壮年	土壌墓	I2I2/I2I2	N43E(137)	N24E(24)	右	鳥骨、鉄製品
2	男	熟年	石棺墓		N68E(112)	N86W(274)	左	
3		幼児	石棺墓			N77W(283)		マツバガイ腕輪
4	女	熟年	石囲墓	CI2C/CI2C	N64E(116)	N66W(294)	正	土器片
5	女	老年	土壌墓	?/I2C	S87E(93)	N88W(272)	左	
6			集骨※	?		N73W(287)		
8			集骨※	CI2C/		N83W(277)		
9			集骨※	?		N76W(284)		
10			集骨※	?		S74W(254)		
14	男	老年	土壌墓	?		N81W(279)		管玉?
15			集骨※	?		N78W(282)		管玉
16	男	老年	土壌墓※	C/?		N78W(282)		
103	女	老年	不明※	?/		N48W(312)		碧玉製管玉
104	女	熟年	土壌墓	C/I2	S43E(137)	N50W(310)	正	ゴホウラ腕輪、マガキガイ指輪、貝珠、碧玉製管玉、土器片
105	男	壮年	不明※			N20W(340)		
107	女	熟年	配石墓	CI2I2C/CI1I2C	S39E(141)	S39W(219)	左	
109	女	熟年	土壌墓	CC/	S40E(140)	S66W(246)	左	貝珠、碧玉製管玉
110	女	壮年	不明※	CI2I2/		N43W(317)		
111	男	老年	不明※	CC/I1		N48W(312)		
125	男	熟年	配石墓		S50E(130)	N68W(392)	左	
126	男	壮年	土壌墓					
127	女	熟年	土壌墓	?/I2I1I1I2	S45E(135)	N56W(304)	正	マガキガイ指輪、貝珠、碧玉製管玉
130	男	壮年	土壌墓		S78E(102)	N88W(272)	左	
131	女	壮年	土壌墓	CI2C/	S66E(114)	N27W(333)	右	
132	男	熟年	土壌墓	C/	S40E(140)	S35W(215)	左	
133	女	熟年	不明※	/?		N82W(278)		
134	女	熟年	不明※	CC/?		N63W(297)		
135		乳児	土壌墓	?		S83W(263)		貝珠
137	女	熟年	石棺墓	?/?		N78E(78)		
138	男	熟年	石棺墓	I2I1I2/	S36E(144)	N31W(329)	正	
139	男	熟年	石棺墓	?		N56W(304)		
140	男	熟年	石棺墓			N55W(305)		
203	女	熟年	土壌墓	?	S58E(122)	N7W(353)	右	タマキガイ腕輪
205	男	壮年	配石墓	I2/				
209	男	老年	集骨※	C/		N69W(291)		
210	男	老年	集骨※	?/		N67W(293)		
211	女	熟年	集骨※	?/C		N62W(298)		碧玉製管玉
212	男	熟年	集骨※	I2/I1		N52W(308)		碧玉製管玉
213	女	熟年	集骨※	C/I1I1		N75W(285)		碧玉製管玉
214		小児	集骨※	?		S65W(245)		
216	男	熟年	土壌墓	CI2I1C/		N9E(9)		
217	男	熟年	土壌墓			N55W(305)		貝輪指輪、貝殻
220		幼児	土壌墓	?	S73E(107)	N28W(332)	右	
223		幼児	土壌墓	?	S40E(140)	S78W(258)	左	翡翠製勾玉
225	男	熟年	土壌墓		S70E(110)	N65W(295)	正	
229			集骨			S86W(266)		
232	男	熟年	集骨	?		S20W(200)		
235	女	熟年	土壌墓	CC/	S79E(101)	N22W(338)	右	
236	男	熟年	土壌墓	?	S76E(104)	N78W(282)	正	

番号	性別	年齢	埋葬遺構	抜歯型式	頭位方向	顔面方向	向き	備考
238	女	老年	配石墓	?	S74E(106)	S86W(266)	左	
240	男	老年	集骨※	C/		N46W(314)		
241	女	熟年	集骨※	CC/CI1		N48W(312)		
242	女	熟年	集骨※	CC/		N42W(313)		
243	女	老年	土壙墓	/CI2I1I1I2C	S55E(125)			
244	女	熟年	配石墓	CI2I2C/	S77E(103)	N86W(274)	正	
246		小児	集骨※	?		N58W(302)		
247	男	老年	配石墓	CI2/	S57E(123)	S8W(188)	左	
248		幼児	土壙墓※	?	S55E(125)	N41W(319)	右	碧玉製管玉
249		幼児	不明※			N65W(295)		
250	男	老年	石棺墓	/I1I1	S58E(122)	N47W(313)	正	朱?
251	女	熟年	石棺墓	?	S61E(119)	N56W(304)	正	貝珠
252	女	熟年	土壙墓	I2I2/	S66E(114)	N20W(200)	左	
253		小児	土壙墓	?	S77E(103)	S29W(209)	左	
254	女	熟年	土壙墓	I2I2/I2I2	S85E(85)	N75W(285)	右	
255	女	壮年	土壙墓	CI2/	S52E(128)	N51W(309)	正	貝珠
303	女	壮年	集骨			N24W(336)		
306		小児	土壙墓	?	S17E(163)	N79W(259)	左	
308	男	老年	配石墓	I1C/I2I1	S77E(103)	S81W(261)	正	
309		小児	土壙墓	?	S58E(122)	N48W(312)	右	タマキガイ科貝類腕輪
310	女	熟年	配石墓	C/	S88E(92)	N82W(278)	右	顔面に赤色顔料
311	女	壮年	土壙墓		S61E(119)	N52W(308)	正	碧玉製管玉、顔面に赤色顔料
312	女	壮年	配石墓	I2I2C/	S51E(129)	N55W(305)	正	
313	女	熟年	土壙墓		S65E(115)	N76W(284)	正	
315	女	壮年	石囲墓	CC/P1CCP1	S46E(134)	n81W(279)	左	アマゾナイト製小玉、碧玉製管玉
403	女	壮年	土壙墓	CC/	S34E(146)			
408	男	熟年	土壙墓		S70E(110)	N8E(8)	右	
409	男	壮年	土壙墓		S64E(116)	N72W(288)	左	赤色顔料
410	女	壮年	配石墓	I2I2/		S1W(179)		
411		小児	配石墓		S53E(127)	N73W(287)	左	
412	女	壮年	配石墓		S90E(90)	S86W(266)	正	
413	男	熟年	配石墓		S45E(135)	N67W(293)	左	
415	男	熟年	土壙墓	?	S66E(114)			
416	男	老年	配石墓	/?	S69E(69)	S64W(244)	正	顔面に赤色顔料付着
417	女	熟年	配石墓		S73E(107)	N81W(279)	左	
418	男	老年	配石墓		S70E(70)	S58W(238)	左	
419	男	老年	土壙墓	?	S86E(86)	N6E(6)	右	
420	男		配石墓	?	S79E(79)			
421	女	熟年	石棺墓	/CI2I1	S64E(116)	N82W(278)	左	赤色顔料
701	男	壮年	配石墓	I2I2/	S55E(125)	N42W(318)	右	貝殻
702	男	熟年	土壙墓	?	S38E(142)	S45W(225)	左	アワビ類の殻
704	女	壮年	土壙墓	?	S41E(139)			
713	男	壮年	土壙墓	?	S62E(118)			
805	女	壮年	土壙墓		S31E(149)	N23W(337)	右	
808	男	熟年	土壙墓	I2I2/	S61E(119)	N66W(294)	右	
809	女	壮年	配石墓	I2I2/	S70E(110)	N63W(295)	右	ツタノハガイ科、アワビ類の殻、二枚貝
901	女	壮年	石囲墓	C/	S49E(131)			ハマグリ、貝小玉
902	男	熟年	土壙墓	?	S66E(114)			アツソデガイ製貝輪、ハマグリ、マガキガイ貝製
907	男	熟年	土壙墓	CC/	S59E(121)			マガキガイ指輪、貝製小玉、ハマグリ
912	男	熟年	土壙墓※	CI1I2/		N54E(54)		

番号	性別	年齢	埋葬遺構	抜歯型式	頭位方向	顔面方向	向き	備考
913	女	老年	配石墓	/P1P1	S46E(134)	N64W(296)	右	
914	女	壮年	土墳墓	/I2I1I1I2	S40E(140)	N87W(273)	左	
1001A	男	壮年	土墳墓	I2I2/	S54E(126)	N32E(32)	右	
1001B	女	老年	土墳墓	I2I2/C	S14E(166)	S70W(250)	左	
1002A	女	壮年	集骨	CI2I2C/CC		N55W(305)		-
1003	男	壮年	土墳墓	I2I2/	S40E(140)	N78W(282)	左	
1004A	女	熟年	土墳墓	I2I2/	S40E(140)	S21W(201)	左	股下に未成人骨
1101	男	老年	配石墓	?	S24E(156)	N22W(338)	正	
1102	女	熟年	土墳墓	/C	S50E(130)	N50W(310)	正	
1104		乳児	配石墓	?	S16E(164)	N23E(23)	右	
1105	男	熟年	配石墓	CI2I2C/	S26E(154)	N46W(314)	左	
1106	男	熟年	配石墓	?	S66E(114)	N76W(284)	左	
1107		小児	集骨			S50W(230)		貝片?
1108B	女	壮年	不明※	CI2C/		N13W(347)		
1108 C	男	熟年	不明※	/I1I1		N47E(47)		
1109	女	老年	集骨	C/		N54W(306)		貝輪製指輪
1110	女	壮年	土墳墓	I2I2/	S58E(122)	S82W(262)	左	
1111A	男	壮年	配石墓	CI2I2C/	S63E(117)			丸玉、小玉
1112-2	女	壮年	集骨	CI2I2C/		N46W(314)		
1112-5	男	熟年	集骨	CI2/		S89W(269)		
1112-6	女	壮年	集骨			N42W(318)		
1112-7	男	熟年	集骨	CC/		N52W(308)		
1112-8	男	老年	集骨	CC/		N28W(332)		
1112-9	男	熟年	集骨			N7W(353)		
1112-10	男	老年	集骨	C/		N24W(336)		
1112-11		小児	集骨			N46W(314)		
1112-12	男	熟年	集骨	C/		N63W(297)		
1112-13	女	壮年	集骨	CC/		N48W(312)		
1112-14	女	老年	集骨			N52W(308)		
1112-15	女	老年	集骨			N55W(305)		
1116	男	熟年	配石墓	CI2/	S43E(137)	S30W(210)	左	アマゾナイト製小玉
1117	女	熟年	集骨			S6W(186)		筭状骨角製品
1118	男	熟年	土墳墓	CC/	S50E(130)	S23W(203)	左	貝小玉、碧玉製管玉、標石?
1119	女	老年	土墳墓	I2I2/I1I1	S66E(114)	S50W(230)	左	
1120A	女	熟年	土墳墓	?	S46E(134)	S29W(331)	正	碧玉製管玉、小玉
1120B	男	熟年	土墳墓	?	S77E(103)	S28W(332)	右	碧玉製管玉
1302		幼児	土墳墓	?	S64E(116)			
1305	女	壮年	配石墓		S64E(116)	N50W(310)	正	サトウガイ類腕輪
1405	男	熟年	土墳墓	I2I2/I2I2	S30E(150)	N64W(296)	左	
1406	男	熟年	土墳墓	CC/	S51E(129)			
1601	女	熟年	配石墓	C/I1I1	S37E(143)	N9W(351)	右	小型壺
1602		幼児	土墳墓	?	S40E(140)	S65W(245)	左	
1604	女	壮年	土墳墓	CC/	S65E(115)	N52W(308)	正	バカガイ左殻
1903		幼児	配石墓	?	S55E(125)	N2W(358)	右	土器、壺、ユキノカサガイ腕輪
1904		小児	配石墓		S80E(100)	N25W(335)	右	甕の胸部

※は頭部再葬例
()は360度表記

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

研究紀要

第 10 号

発行年月日	2015 年 3 月
編集・発行	土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 〒 759-6121 山口県下関市豊北町神田上 891-8 TEL 083-788-1841 FAX 083-788-1843
印 刷	藤井印刷株式会社 〒 750-0009 山口県下関市上田中町5-6-24 TEL 083-231-1612 FAX 083-222-8611
